

Fact Sheet

イレヌ・ジョリオ＝キュリー (Irène Joliot-Curie, 1897-1956) ― 「天才科学者夫妻の娘」という宿命

イレヌ・キュリーは、幼少期から「天才科学者夫妻の娘」として、例外扱いされてきた女性である。被占領国ポーランド出身ということで、母のマリーがそうだったように、「キュリー夫妻の娘」というレッテルは、同時代のフランス女性を縛っていたジェンダー（社会・文化的性）の鎖から、イレヌをある程度自由にしてくれた。

共働きの両親に代わって、イレヌの面倒をみてくれたのは父方の祖父、ウージェーヌ・キュリーである。父の死後は特に、お爺さんっ子の少女は、4月革命の闘士だった祖父から、断固たる「共和国の精神」―科学的合理主義と反教権主義―を受け継いだ。じつにイレヌはその生涯の最後まで、たとえ観光という名目であろうとも、「教会」と名のつく建物に足を踏み入れなかった。こうした少女が月並みな男女差別を受け入れるわけがない。そもそも母マリーの存在が「知性」と「女性」が両立しえることの動かし難い証拠だった。

マリーは2人の娘たちに、思想の自由と肉体の鍛錬、自立の精神を奨励してはばからなかった。これは当時の標準的な女子教育とは正反対の方針である。妹のエーヴが後に、知らない人にきちんと挨拶することを母が教えてくれなかったので、困ったことも多々あった、という趣旨の文章を書き残しているが、これは要するに「常識」など無視してもかまわないという母の暗黙の主張である。だからイレヌには、女性である自分が科学の道を選ぶことにためらいなどなかった。むしろ「両親の名に恥じない科学者になれるだろうか」という不安の方がよほど大きかったろう。

結婚に関しても、イレヌは両親を見習った。夫の方が年齢も学歴も下という違いはあるが、やはり共同研究者を伴侶に選んだ。しかも「キュリー」の名を捨てなかった。新しいカップルは、正式に「ジョリオ＝キュリー」と名乗り、妻は論文で生涯イレヌ・キュリーを通した。彼女は科学者として、夫と同時に母の同志でもありつづけた。研究分野も両親の後を継いだものである。母の死の直前に夫妻で発見した人工放射性元素は、翌年のノーベル化学賞となって世界の賞賛を浴びた。これが2人目のノーベル賞受賞女性である。

ひとつだけ違いがある。ジョリオ＝キュリー夫妻は、先代のキュリー夫妻よりもずっと政治的だったことだ。夫のフレデリックは、共産党員であるために政府の要職を追われたこともある。イレヌも左翼だったが、党員にはならなかった。この「独立」は、左右どちらの側から見ても、当時の「常識」―妻の服従―に反するスキャンダルだったが、「常識」を無視するよう育てられた母の娘は、夫と自分の思想的自由を等しく尊重したのである。

イレヌは母と違い、夫に看取られて死んだ。「妻は自分が動けなくなることは耐えられない〔から、寝たきりにならずに済んでよかった〕」というフレデリックの告白は、科学に賭けたイレヌの情熱と、妻に対する夫の深い理解を物語っている。イレヌ・ジョリオ＝キュリーは、その2年後に死亡したフレデリック同様、国葬で葬られたフランスの英雄である。

（裏面につづく）

Fact Sheet



化学と歩む
—— チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ

イレーヌ・ジョリオ＝キュリー 略年譜

年代	年齢	
1897年		9月12日 ピエール・キュリー、マリー・スクォドフスカ・キュリー夫妻の長女としてパリに誕生
1903年	6歳	12月 両親が第3回ノーベル物理学賞を受賞
1904年	7歳	12月 妹エーヴ誕生
1906年	8歳	4月 父ピエール馬車の事故で死亡
1910年	12歳	2月 父方の祖父ウージェヌ・キュリー死亡
1911年	14歳	母マリーはランジュヴァン事件に巻き込まれるが、同時に第11回ノーベル化学賞を受賞 母と共にストックホルムに行き、ノーベル賞の式典に出席
1914－1918年	16－21歳	第一次世界大戦 母の組織したレントゲン車隊で、技師兼教師として活躍 この間にソルボンヌ大学理学部で、物理、化学、数学の学士号を取得
1918年	21歳	母が所長を務めるパリのラジウム研究所の助手になる
1921年	23歳	5－6月 妹と共に母のアメリカ旅行に同行 母がアメリカ大統領からラジウム1gを贈与される式典に立ち会う
1925年	27歳	3月 フランス国家理学博士号取得
1926年	29歳	10月 同僚のフレデリック・ジョリオと結婚、夫妻は公式にジョリオ＝キュリーと いう複合姓を名乗る 論文はイレーヌ・キュリー、フレデリック・ジョリオ名で書き続ける
1927年	30歳	9月 長女エレーヌ誕生
1932年	34歳	3月 長男ピエール誕生
1934年	36歳	ジョリオ＝キュリー夫妻、人工放射能を発見 7月4日 母マリーが長年の放射線被ばくによる白血病で死亡
1935年	38歳	12月 ジョリオ＝キュリー夫妻、第35回ノーベル化学賞を受賞 女性の受賞は3回目、女性受賞者としては母マリーについて2人目
1936年	38歳	6月 人民戦線内閣の科学担当長官に就任するが、2ヶ月で退任（この時にフランス女性 にはまだ選挙権がなかった 女性選挙権成立は1944年）
1939年	41歳	9月 第二次世界大戦勃発
1940年	43歳	6月 ドイツ軍がパリを占領 年末 対独レジスタンスに参加
1944年	46歳	6月 子どもを連れてスイスに避難 8月 パリ解放
1945年	47－48歳	8月 原子爆弾が日本に投下され、第二次世界大戦終了 12月 フランス原子力委員会発足、委員となる（夫のフレデリックは委員長に就任）
1948年	50歳	6月 在米スペイン難民支援のために訪米するも、マッカーシズムから危険人物と判断 され、一晩収監される
1950年	52歳	4月 共産党員であるために、夫が原子力委員長から解任される 6月 本人も同委員委嘱契約を不更新 7月 夫の第1回国際平和賞授賞式のため、夫妻でソ連訪問
1956年	59歳	3月17日 長年の放射線被ばくにより、母同様白血病で死亡 2年後、夫も放射線被ばくによる肝臓病で死亡

(名古屋工業大学工学教育総合センター准教授 川島慶子)
(画像提供:AIP Emilio Segrè Visual Archives)